

高齢化率90パーセント 中手集落の挑戦

新潟県十日町市 中手地域づくり会

中手地域づくり会会長 江村 元吉
地域おこし協力隊 山口 洋樹

新潟県十日町市の中手集落は、住基台帳

上は8世帯10人ですが、年間を通して生活しているのは4世帯5人。そのうち4人が75歳以上。豪雪地と呼ばれる新潟県十日町市の中でも標高が高い位置に中手集落はあります。店もない、公共交通機関もない、平地より長い冬を強いられる厳しい集落が立ち上がりました。「諦めない、行動は何かを生む」をスローガンに、集落の未来を嘆くより進んで行動してみよう。集落出身者や地域おこし協力隊など「外側の力」を活用し会員の寄付金のみで地域づくりを実施。幻の滝「黒滝」を整備し一般公開からわずか1年で文化財に登録。これをきっかけに、同じ問題を抱える多くの中山間地域に刺激

を与える活動は注目を集めています。

一枚の写真から始まった 地域づくり 中手集落

平成27年の春。過疎化が進む集落で神社の祭礼すら実施しなくなってしまうたら本当にこの村は絶えてしまう。そのような思いから5月4日、春の祭礼は執り行われませんでした。

5月とはいえ田畑は多くの雪に覆われています。参加者の多くは70歳を超えており今後の集落存続について酒の力も借りながら真剣に話し合われました。この時、中手を地域外の人たちにも知っていただく積極



十日町市指定文化財『中手の黒滝』



的な情報発信が必要なのではないか、という提案に、様々な意見が交わされました。

そこで「黒滝」はどうかと、それぞれの『幻の滝 黒滝』への想いが語られました。約50年も放置され、原野と化しており、幼いころの記憶を頼りに雪の上を進んだところ「黒滝」は今もそこに雄大な姿を見せていました。これを衰退していく集落の希望にしよう地域づくり会は発足しました。

まずは写真家にお願ひし、写真を残すことから活動はスタートします。写真を撮るにも滝の周りは灌木が生い茂り視界を遮るため、まずは伐採作業などの整備をし、展望台を設置し、翌年、一般公開をしました。この景観は反響を呼び、当時7世帯10人の小さな集落に多くの人が訪れ、わずか1年で十日町市指定文化財の認定を受けました。

この活動は決して集落にお金が落ちるわけではありません。集落住民が疲弊する故郷を不憫に思わず、此処で生まれて良かったという想いを共有できることがこの活動の軸と考えています。

加速する週疎化に、 地域づくり事業も加速させる

「黒滝」の保全活動などにかかる経費は

全て寄付金で賄うことにしました。昭和63年22世帯50人以上、明治時代は150人以上の集落でした。道路が整備されるも、公共交通機関がないと子どもたちの進路とともに生活のしやすい平地や市街地へ家族単位で多くの住民が集落を出ていきました。「道が良くなると人は出ていく」と多くの中山間地で囁かれています。

しかし、生まれ育った故郷。心晴れやかに集落をあとにした人はいなかったと思われます。集落を出て行った方々に共通する後ろ髪を引かれる想い。時を追うことに募る「今、故郷はどうなっているのだろうか？」という思い。そういう人たちの想いで地域づくり会は支えられています。

そんな人たちに還元したい思いで地元酒造会社にて「清酒 幻の黒滝」を製造依頼。近隣集落の酒屋一店舗のみの取り扱いで、なおかつ支援者への贈答の意味合いで作ったものの1年で累計400本以上の販売に至りました。

少しずつ活気づいてきたものの、集落の人たちにとって自分事と捉えてもらうにはどうしたらいいか。もっと集落全体で関わることができるかと思った時、酒の席で語られる思い出話。その中で多いのはお祭りです。集落のほとんどが70歳以上でどこまでできるかわかりませんが、お祭り



清酒『幻の黒滝』を発売

を復活させました。近隣集落の協力も募り、住民みんなが役割を持ってお祭りを実行しました。このことは各新聞社にも取り上げられ小さな集落がもがいている姿を多くの人に知ってもらえました。

そして集落の景色をパネルにし、もっと多くの人に知ってもらおうと銀行、郵便局、農協、温泉施設などの公共的な場所で写真を展示しました。

「中手は元気です」を伝えるために

いつもある想いは「集落を離れた人に、



中手の四季をモチーフにしたフレーム切手



大地の芸術祭 バルトロメイ・トグオ作「welcome」



毎年、真田郷里山交流コンサートを開催



『新潟県の名水』に選定された「中手の松平清水」

中手は元気ですと伝えたい」という気持ちです。そのために中心市街地でパネル展を開催しました。「7世帯の集落でもできること」小さなムラの活動報告」と題し、集落を離れた人に直接会って、現在の中手集落の姿を知って頂きました。地域おこしという概念からすれば特産品や地場産業など経済活動に関わる部分を注視しがちですが、「此処で生まれて良かった」という住民の心に宝物や誇りを持ってもらう活動を意識しています。

それを具現化する意味で集落の歌を作りました。「愛しの中の手」という中手の四季を織り込んだ歌詞と口ずさみやすいメロディーの歌をパネル展で披露しました。これまでの活動が郵便局の目に留まり、中手の景色が印刷されたオリジナルハガキ、黒滝をモチーフにしたフレーム切手が発売されました。さらに、十日町市で3年に一度開催される「大地の芸術祭」開催において、集落自ら手を挙げて作品を誘致することができました。

さらに、集落には300年絶えたことのない清水があります。集落にとっては昔からある清水ですが、多くの人が遠方から訪みに訪れます。住民による保全活動が評価され、平成30年、十日町市で5例目となる『新潟県の名水』に選定されました。このような活動、集落の想いはNHK新潟放送の目に留まり、番組で特集されることとなりました。ディレクターが一番共感したのは、集落が閉じ方を考えていることです。高齢化率90パーセントの集落が5年後も続く保証はどこにもありません。この集落の歴史と住民の営み「私たちはここで生まれ、ここで生きた」という軌跡。そんな記憶を記録するため、今現在、集落史の編纂作業を進めています。